

3. 会津の古寺と念仏踊りをはじめとする仏教行事にみる歴史的風致

(1) はじめに

奈良時代後期以降、会津地方では遺跡の数が急激に増えており、この頃人口が大幅に増加したと考えられ、この人口増加に伴い仏教も広まったと考えられます。この時代に河東町にある郡山遺跡で梵鐘の鑄造が行われており、平安時代初期には法相宗の僧である徳一が会津に入り、仏教を広めたといわれています。また、会津地方には、平安時代から中世、近世の仏像が多く残されており古くから仏教が盛んであったことから、現在では、「仏都会津」と呼ばれています。そのなかでも、冬木沢を中心とした河東地区には、創建が平安時代とされる八葉寺に関連する建造物が残っています。

八葉寺は、「会津の高野山」とも呼ばれ、毎年8月1日から8月7日まで行われる祭礼には会津地方一円より参拝者が訪れ、「冬木沢参りの習俗」の名称で、国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されています。また、県指定の重要無形民俗文化財である空也念仏踊が伝わっており、墨染めの衣をまとった地元の保存会（空也光陵会）が、鉦や太鼓を打ち鳴らし、「ナモーダ（南無阿弥陀仏）」と独特の発音で念仏をとなえて、祖先の供養、極楽往生を願います。

(2) 建造物等

八葉寺は真言宗の寺院であり山号は諸陵山しよりょうざんです。会津総菩提所そうぼだいしよ、会津高野山などの別名をもちます。

康保元年（964）に高僧空也がこの地を訪れた際、阿弥陀仏と経典を納めた堂宇どううを建立したことが始まりとされ、空也の墓や木像など、ゆかりのものが残されています。また、『新編会津風土記』（享和3年（1803）～文化6年（1809））には、阿弥陀堂のほか、鐘楼、本堂、空也水（空也清水）、闕伽井（浄土池）、十王堂、開山堂（空也堂）、奥院の記載があり、当時から参詣されていた様子がわかります。八葉寺阿弥陀堂は、天正17年（1589）に伊達政宗によって焼き討ちにあいましたが、その後文禄年間（1592～96）に再建されました。

境内は八葉寺阿弥陀堂を本堂とし、右に十王堂、左に空也上人像を安置する空也堂、奥に奥之院が配置されています。また、仁王門、空也清水、鐘楼、寺名の由来となる、かつて八葉の蓮が咲いたとされる池「浄土池」があり、冬木沢参りではこれら12の施設を順に巡ります。



『新編会津風土記巻之八十六』に記載されている八葉寺阿弥陀堂

①仁王門

慶長11年(1606)の建立とされ、その後幾度か補修されています。左右の阿吽の仁王像もあり、門の建立と同時に造像されたと考えられています。仁王像は木製で両方とも約160cmあります。昔ながらに大きな草鞋を奉納する習慣が残っています。

『八葉寺木製五輪塔の研究』(昭和48年(1973))に、金属板の屋根が葺かれる前の、茅葺屋根であった当時の写真が掲載されています。



仁王門

②浄土池

空也が冬木沢に堂宇を建立し、浄水不足で悩む住民のため、もう一つは阿弥陀如来に供える閻伽水を得るために掘られた際、湧き水がたまった池といわれており、そこに八葉の蓮が生じたことが寺名の由来になったとされます。『八葉寺木製五輪塔の研究』(昭和48年(1973))に写真が掲載され、同じ形態を維持していることがわかります。



浄土池

③空也清水

空也が独鉗杵でこの地を掘ったところ湧き出たと言われる清水です。神社仏閣では通常門の周辺に手水があり、自ら手や口を漱ぎますが、ここ冬木沢では祭礼期間中、僧侶により手を清めてもらいます。その際、真言とされる「オンバロダヤソハカ(沐浴身体 當願衆生 内外光潔 身心無垢)」が唱えられます。上屋の建築年代は不詳ですが、『新編会津風土記』(享和3年(1803)~文化6年(1809))には、空也水として絵図とともに記されています。



空也清水

④八葉寺阿弥陀堂(国指定の重要文化財(建造物))

八葉寺阿弥陀堂は妻入りで配置され、桁行3間、梁間3間、屋根は単層茅葺の入母屋造りです。

明治37年(1904)に旧古社寺保存法に基づき特別保護建造物に指定され、昭和25年(1950)の文化財保護法施行後は重要文化財となっています。

冬木沢の高野山参りの際に、木製五輪塔と呼ばれる小型納骨塔婆及び納骨器が堂内に多く納められていましたが、大正15年(1926)の解体修理に伴い奥之院に移されました。



八葉寺阿弥陀堂

⑤^{じゅうおうどう}十王堂

十王とは冥界において亡者の罪業を裁く 10 人の王で、その中心的存在が閻魔大王とされます。このお堂の木造閻魔大王座像は体内銘に享保 15 年（1730）に、常連道静信士の供養のため仏師右近成就が作製したとあります。盗難にあい、現在は両眼球がありません。像高 90 cm、台座 30 cm。また堂内には閻魔大王以外の九王も祀られていますが、それらの年代は不詳です。昭和 42 年（1967）に行われた河東村民俗資料調査の際の写真に現在と同じ礎石が記録されています。現在のお堂は、令和 4 年（2022）に建替えられました。



十王堂

⑥^{ちやとうば}茶湯場

先祖の精霊にお茶を献ずるところで、僧侶がお経を唱えながら献茶を行います。『新編会津風土記』（文化 6 年（1809））の境内図に記載があることから、古くからの風習であると考えられています。昭和 42 年（1967）に行われた河東村民俗資料調査の際の写真に記録されています。



茶湯場

⑦^{おくのいん}奥之院

3間四方の建屋で、以前は茅葺屋根でしたが、現在は改修に向け仮設となっています。江戸中期の造像とされる像高 57cm の阿弥陀如来像が祀られています。それまで壁や柱に隙間なく打ち付けられていた約 15,000 基の納骨木製五輪塔は、舍利殿に移され納められています。現在、新たな五輪塔が再び奥之院に納められ始めています。『八葉寺木製五輪塔の研究』（昭和 48 年（1973））には、現在と同じ礎石とともに、茅葺屋根の姿の写真が掲載されています。



奥之院

⑧^{うばどう}姥堂

祭礼の期間のみ像高約 56cm の木造姥座像が祀られるお堂です。姥は、三途の川のためとで番をする老婆であり亡者の衣服を剥ぎ取る奪衣婆が元々の姿とされ、後に安産や子育てに御利益のある「おんばさま」として信仰されています。昭和 42 年（1967）に行われた河東村民俗資料調査の際の写真に記録されています。



姥堂

⑨墓所

空也は天禄3年(972)9月11日に70歳でこの地で往生し、墓とされる宝篋印塔ほうきょういんとうが現存しています。

現在の墓石は江戸時代に再建立されたと考えられています。

『八葉寺木製五輪塔の研究』(昭和48年(1973))に写真が掲載され、同じ形態を維持していることが分かります。



墓所

⑩空也堂

2間四方のお堂で、「木造空也上人立像」が安置されています。木像の作製年は不明ですが、体内銘板には、鎌倉時代に活躍した運慶派の仏師である康運の弟子の系統で、京都の仏師であった浄慶の作と墨書きされています。延宝4年(1676)に別当金剛寺17世栄徹しょうてつにより開眼供養され、目は玉眼、像高164cm、台座21cmです。その姿は空也が念仏踊りを確固たる信念で進められている様と伝えられています。

現在のお堂は、令和4年(2022)に建替えられました。昭和42年(1967)に行われた河東村民俗資料調査の際の写真に現在と同じ礎石が記録されています。



空也堂

⑪鐘楼

元々は仁王門の右方にあり、宝永7年(1710)鑄造の梵鐘が架かっていました。しかし昭和18年(1943)第二次世界大戦に供出したため、しばらく梵鐘がありませんでした。今の梵鐘は、昭和38年(1963)別当金剛寺36世元興が、八葉寺の開基一千年を記念して再鑄造し、現在地に移したものです。

同時に行われた鐘楼の再建には樹齢500年を超す樹が2本使われたと言われます。祭礼期間中、毎日午後1時からの施餓鬼法要開始の合図として突かれています。

『八葉寺木製五輪塔の研究』(昭和48年(1973))に写真が掲載され、同じ形態を維持していることが分かります。



鐘楼

⑫舍利殿

昭和60年(1985)に、鉄筋コンクリート造による耐火建築物として建設され、それまで奥之院に納められていた木製五輪塔は、舍利殿に移されました。
※建築後50年を経過していない建造物です。



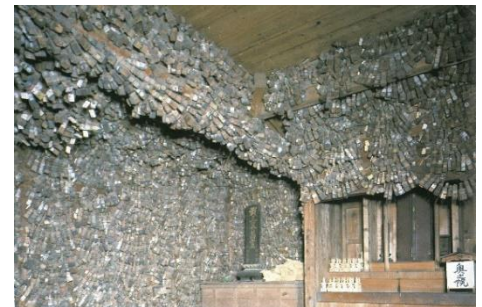
舍利殿

(3) 活動

①冬木沢参りの習俗(国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財)

(ア) 起源・歴史

この風習がいつから始まったのかは明らかではありませんが、最古の木製五輪塔は文禄4年(1595)のものがあり、江戸時代初期から昭和に至るまで、約15,000点が国の重要有形民俗文化財に指定されており、この地において長く続けられていることが分かります。これらの木製五輪塔は、現在は舍利殿に移され、納められています。



八葉寺奉納小型納骨塔婆及び納骨器(奥之院に釘で打ち付けられた木製五輪塔)

木製五輪塔による奉納は、わずかながら現在も脈々と続けられています。会津若松市の中心部にある別当金剛寺の記録によると、16世紀中頃に金剛寺11世の宥案が高野山遍照光院で修業していることから、紀州高野山で長く行われている奥之院への納骨風習が会津にもたらされた可能性があると考えられています。

(イ) 現在の活動

境内に続く丘陵は、亡くなると靈魂がここに移って住むと信じられ、八葉寺阿弥陀堂周辺は会津の高野山ともいわれる霊場です。

毎年旧暦7月1日から11日(現在は新暦8月1日から7日)までの期間、身内に不幸があり、祭りの日までに百日たった家では、死者の初盆を迎える前に「冬木沢参り」または「高野山参り」と呼ばれる家族でお参りする風習があります。

祭り期間中は、60基以上の灯籠が設置された参道を、多くの家族が往来する姿が見られます。このとき、亡くなった人の骨・歯・爪・毛髪などを、手作りか寺で準備してある小さな木製五輪塔に納め持参します。



参道沿いに設置された灯籠



カンナガラボトケ(左)と木製五輪塔(右)

お参りは、次の順で行われます。まず仁王門をくぐり正面の浄土池右手にある空也清水で手を清めます。その後、境内中央に配置された八葉寺阿弥陀堂に参拝してここで木製五輪塔を手渡しして供養を依頼し、カンナガラボトケという経木を受取り右手にある十王堂を拝み、石段を登って茶湯場に寄り、茶を仏に供えてから奥之院に参拝します。さらに姥堂から空也の墓に参拝し、石段を降りて空也堂の参拝後、鐘楼の脇を進んで浄土池の前を通り、最後に舍利殿を拜んで仁王門をくぐり、帰途につきます。



祭り期間中に仮設される
施餓鬼堂

大正時代までは盲目のオワカサマ、アガタと呼ばれる巫女十人前後が、阿弥陀堂の脇にゴザを敷いて座り、参拝者の求めに応じて仏おろし（亡者の霊を招く）を行い、家族と対話する口寄せが行われていました。

冬木沢参り 期間中の主な流れ

日時等	踊り手方	僧侶方
7月	毎週土曜日、冬木沢集会所において念仏踊りの練習を実施	
7月30日		八葉寺阿弥陀堂境内へ施餓鬼堂（仮設）を設置
7月31日 9時		参籠宿所において準備 ※期間中は参籠宿所へお籠り
8月1～7日 日の出		参詣者の手のお清め（空也清水）
8月1～7日 ~12時		先亡精霊への献茶（茶湯葉）
8月1～7日 13時		施餓鬼法要開始の合図（鐘楼）
8月5日 9時	八葉寺本坊において身支度	施餓鬼法要
8月5日 10時	八葉寺本坊の鐘の音と共に出発。これに呼応して、八葉寺阿弥陀堂の鐘楼の鐘の音による合図。	
8月5日 10時	空也堂への参詣、趣旨口上、念仏踊り奉納	
8月5日 10時30分	念仏踊り終了、八葉寺本坊へ移動	
8月5日 11時30分	八葉寺本坊において身支度を済ませ直会開始	
8月7日 日没		
8月8日 9時		境内地内の施餓鬼堂（仮設）を撤去

②空也念仏踊

(ア) 起源・歴史

大正10年(1921)に、東京と横浜の信者によって組織された「空也光勝会」より伝授されたもので、当地での歴史は比較的新しいものの、その振りは空也が始めた念仏踊りはかくあったと思わせるほど古風です。東京と横浜における「空也光勝会」は、大正12年(1923)に発生した関東大震災のあと解散し、踊りも途絶えたため、今では貴重な存在となっています。

(イ) 現在の活動

この念仏踊りは、八葉寺空也堂の前で空也の縁日である8月5日午前中に冬木沢地区保存会の「空也光勝会」によって奉納されている踊りです。別に「歓喜踊躍念仏」、「かねたたき」ともいわれています。

これは導師1名と職衆8名が黒染の衣に袈裟をかけ、定盛頭巾を冠り、白の脚絆に白足袋草履をはき、背中には袈裟飾りである糸垂(導師は白色、職衆は緋色)をつけ、導師は胸に鰐口と呼ばれる鉦を吊るし、右手に鐘を打つ撞木、左手に鹿角を冠頭につけた錫杖を持ちます。職衆は瓢箪2人、鉦2~3人、太鼓2人で踊ります。曲目は香偈、三宝礼、祭文、懺悔、空也上人和讃、歓喜踊躍和讃、十念仏等が伝えられています。

毎年、念仏踊りの開催日に合わせて、約1か月前から和讃を唱え、鳴物を鳴らしながら行われる念仏踊りの練習が行われています。

長らく仁王門脇にあった地区集会所に集合し練習が行われてきましたが、平成29年(2017)に、阿弥陀堂に隣接する八葉寺本坊の境内に、僧侶方が使用する参籠宿所が建替えられ、そこに併設されている集会所で行われるようになりました。平成30年(2018)より現在の集会所において7月の毎週末、午後7時頃から1時間程度練習が行われており、和讃や鳴物の音が静まった地区内に響き渡ります。

8月5日の念仏踊り開催日当日は、午前10時を過ぎるころ、八葉寺本坊で打ち鳴らされる鐘の音と共に導師、職衆が八葉寺本坊から八葉寺阿弥陀堂に移動し、空也堂の周りに詰めかけた拝観者に囲まれながら、「ナモーダ(南無阿弥陀仏)、ナモーダ(南無阿弥陀仏)」と独特の発音で念仏をとえながら祖先の供養や極楽往生を願い、空也念仏踊りが奉納されます。



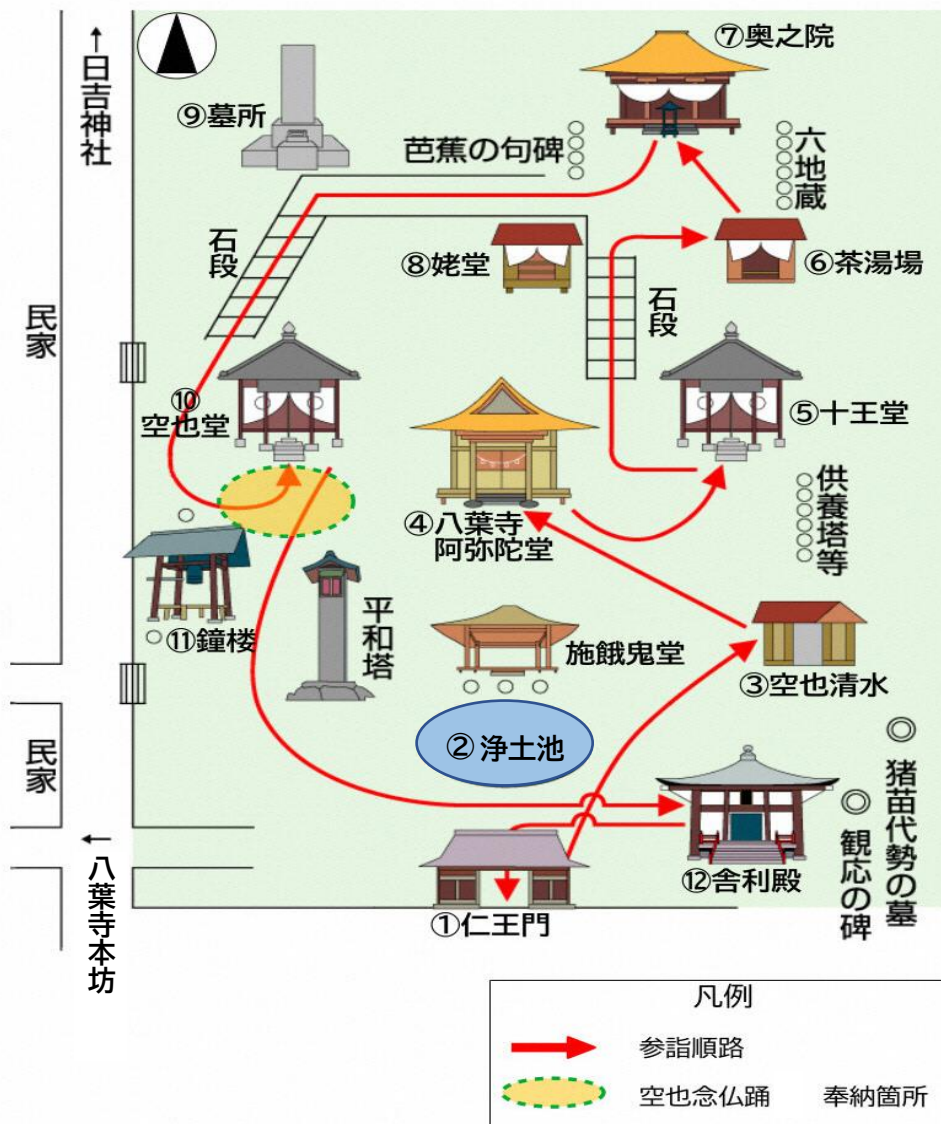
空也念仏踊



『新編会津風土記卷之八十六』
に記載のある鹿角



空也念仏踊(集会所での練習)



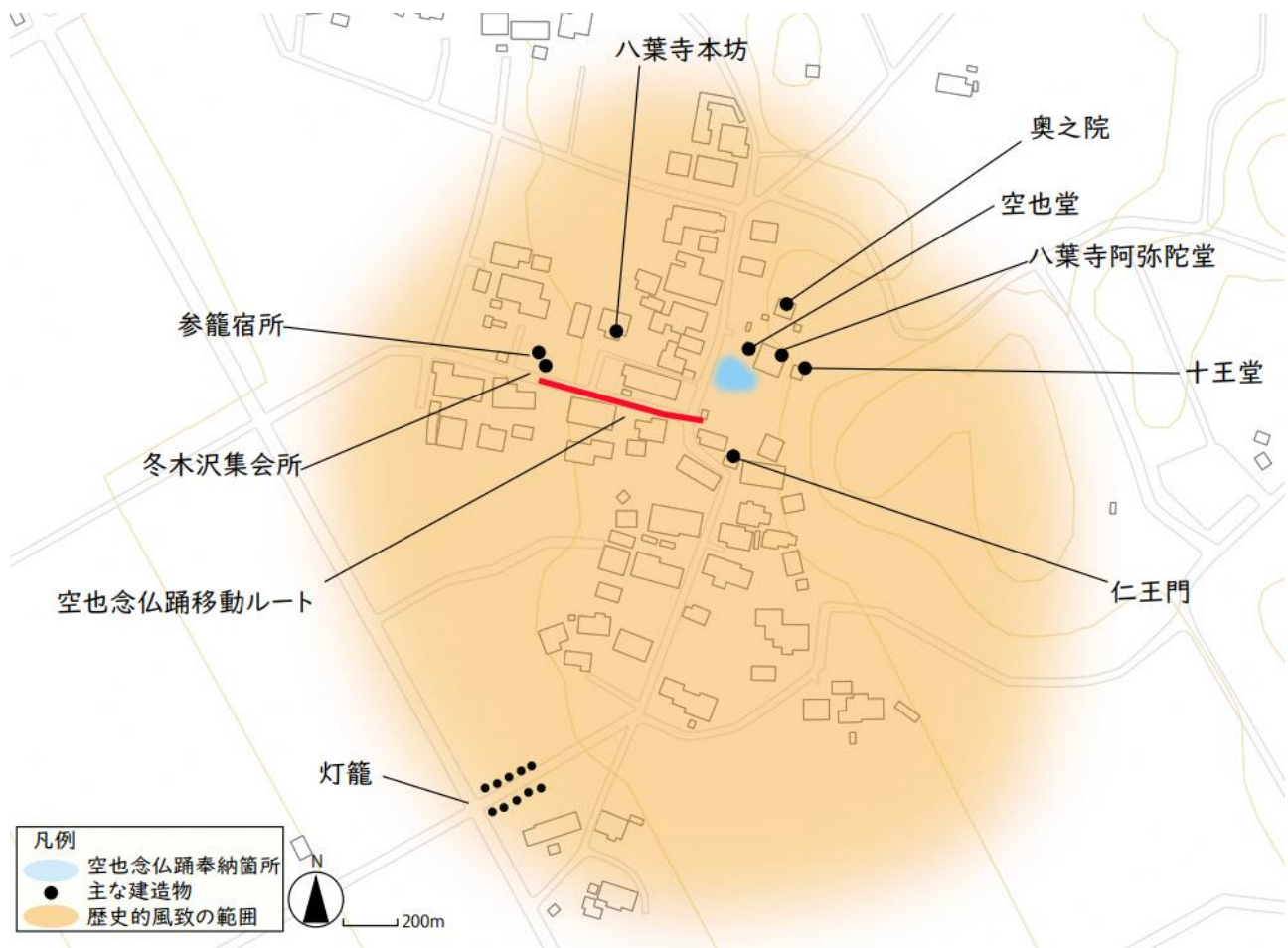
冬木沢参りの参詣順路と空也念仏踊の奉納箇所

(4) おわりに

会津盆地の東北に位置する河東町冬木沢地区では、会津の高野山として古くから人びとの信仰をみつめ、毎年お盆前の祭礼期間中に行われる「冬木沢参り」は、会津地方における篤い信仰心により続けられてきました。

また、かつて空也が鎮魂の為の踊りとして全国に広めたとされる念仏踊りは、「空也念仏踊」として、現在も地区内の空也光陵会により継承されています。

このように祭礼期間中、参拝に訪れる人々と供養に当たる住職の読経、また、念仏踊りの鉦と共に何度も繰り返される「ナモーダ（南無阿弥陀仏）」の歌声が地区内に広がり、建造物群と共に歴史的風致が形成されています。



歴史的風致の範囲

【コラム 会津三十三観音めぐり】

会津地方の各地区には仏教に関わる文化が数多く残されており、田村山観音や滝沢観音など三十三の札所で御詠歌を唱えながら各所をめぐる習俗もその一つです。

三毒の悪しき心（貧：とん＝むさぶること、瞋：じん＝いかること、痴：ち＝おろかなこと）を、三十三観音を巡礼することで仏の慈悲により消し去ってもらい、心の安らぎや健康長寿、やがてころりと安楽往生がかなうとも考えられています。

会津地方における三十三の札所の開設時期は不明ですが、一般的な定説として、会津藩の藩祖である保科正之が制定に関わったともいわれており、南北約 34 km、東西約 13 km の会津盆地内を巡る全行程は約 180 km あり、昔は徒歩にて約 1 週間を掛けて巡ったとされます。

会津若松市域には 9 箇所（12 番田村山、13 番館、14 番下荒井、15 番高瀬、16 番平沢、17 番中ノ明、18 番滝沢、19 番石塚、20 番御山）があります。

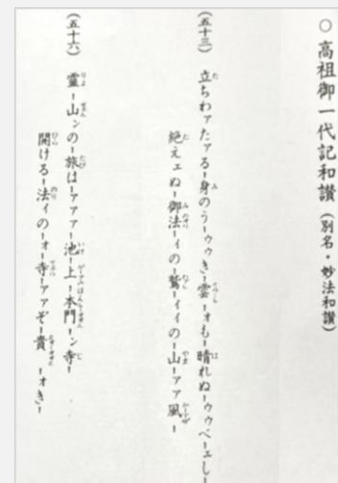
会津地方では女性が嫁入りするとその地域の女性たちの前でナビロメ（名披露目）と呼ばれる儀式を行い、数名の仲間て構成される観音講に加入し、農閑期などに三十三観音巡りを行っていました。観音講は女性のみで集まることが多く、信仰的な行事であると共に、出産・育児のほか、地域生活の様々なことを年上の女性から習う機会でもあり、交流・情報交換の場でもあったとされます。また、日露戦争以降の明治期後半から大正期にかけては、地域の観音講を母体とする婦人会が成立し、観音講は各地域における行事のひとつに位置づけられることも多くみられました。

巡礼の際には御詠歌（七五調の短歌形式で詠む和讃）が詠じられますが、各地域で行われる観音講や、葬式後七日ごとに仏前で行われる「歌詠み」の行事としても広く受け継がれ、宗派ごとに続けられています。

会津の三十三観音めぐりは、数は少なくなりましたが現在も継続して営まれており、仏都会津を象徴する活動として、平成 28 年（2016）に日本遺産に認定されました。



田村山観音に掲げられている御詠歌



東山町院内地区において続けられている歌詠みの内容(抜粋)